

参考資料

(資料5)

◇日本の近代的労働運動発祥の地に関する記念碑と遺構（補足資料）

1. 遺産の現況

○日本労働運動発祥之地「石碑」（右写真の左側）

碑文：日本労働運動発祥之地 建碑之記

大正元年（一九一二年）八月一日、この地に在った基督教ユニテリアン教会「惟一館」において、鈴木文治ら十五名が「友愛会」を創立し、それ以来、我が国労働運動は継続して発展して来た。

この故をもって、ここは我が国労働運動発祥の地であり、労働運動の主流を形成して来た由緒あるところである。

この歴史と伝統を継承する日本労働会館と友愛会館は、友愛会創立六拾六周年を記念して建碑する。

昭和五十三年（一九七八年）八月一日建之

財団法人 日本労働会館

株式会社 友愛会館



（石碑と煉瓦）

○ユニテリアン教会「惟一館」（初期労働会館）の煉瓦塀の一部と煉瓦（上記写真の石碑横）および焼失前の惟一館と煉瓦塀

1894年に建設されたユニテリアン教会「惟一館」（初期労働会館）は、友愛会創立の地であり、事務所の置かれた惟一館の建物は焼失し現存していないが、その煉瓦塀の一部および煉瓦は、惟一館の威容をしのぶ貴重な遺構である



左：ユニテリアン教会「惟一館」

右：惟一館を囲っていた煉瓦塀

2. 来歴（友愛労働歴史館による解説、および関連する諸資料等を踏まえ）

○福沢諭吉らの招聘により来日した米国ユニテリアン協会は1894年、東京・芝の地にユニテリアン教会「惟一館」を建設した。1898年には惟一館において、安部磯雄や村井知至などにより社会主義研究会（後の社会民主党）が結成されたこと。そして1912年（大正元年）、同惟一館に電気工、機械工、畳職、牛乳配達夫、撒水夫ら14名と、当時教会で雑誌の編集や労働者倶楽部を主宰していた青年クリスチャン「鈴木文治」によって「友愛会」が創立され、労働組合運動に多くの影響を与えながら歴史を引き継ぎ、その後の連合に至る全国労働運動の発展に結びついたこと。等から、この場所は日本社会主義運動、および日本労働運動の発祥の地とみなされるようになった。

○一方、友愛会の発足は、友誼的、共済的な団体としてのスタートであった。それは、1897年、高野房太郎などによりわが国初の全国労働団体とされる「労働組合期成会」が結成されたが、その後の治安警察法の制定など明治政府の激しい弾圧を受け活動継続ができなかった経過や、依然として続く官憲の圧迫、労働問題に対する世間の認識は極めて乏しい等の状況を踏まえたものであった。

○発足から3年（1914年）、友愛会の存在を高めたのは「東京モスリン吾嬬工場」の解雇（千人）と賃下げの争議に対し、ストライキ戦術を含む支援をしたことである。この争議結果は、労働者側には厳しいものであったが、争議を通じて、会社に対する影響力など友愛会の存在意義が多く労働者に認識され、友愛会本所支部が結成された。これらの活動を通じて、友愛会は、東京各所（品川・板橋・佃島・小石川・麻布・大崎・神田等）だけでなく、神戸や京都などにも分会が誕生するなど急激に組織的発展をし、大正10年には日本労働総同盟（総同盟）へと改称していった。

○1930年、友愛会の後身である総同盟は、組合員の募金活動や、安部磯雄、賀川豊彦、新渡戸稲造、吉野作造などの物心両面の支援もあり、惟一館の土地・建物を購入、建物を改装し、1931年、日本労働会館として落成させた。なお、同年には、管理・運営のため財団法人日本労働会館も設立された。

○建物は1945年、東京山の手大空襲で焼失したものの、1949年にはこの地に総同盟会館・全織同盟会館、1964年には友愛会館が建設され、総同盟、総評、同盟の本部、産別本部などとして活用されてきた。2012年には、新しい友愛会館が建設され、引き続き産別本部などとして、労働運動の枢要を支える役割を担い続けている。

○1978年、（財）日本労働会館と（株）友愛会館は、友愛会創立66周年を記念して、日本労働運動発祥之地「石碑」を友愛会館敷地内に建立した。

○戦前の惟一館周囲には煉瓦塀が張り巡らされており、戦後も一部の煉瓦塀は存在していた。2012年の新しい友愛会館建設により煉瓦塀は撤去されたが、基礎部分の一部は惟一館を偲ぶモニュメントとして、日本労働運動発祥之地「石碑」の横および後方に残され、煉瓦の一部はこの石碑を囲む花壇に再利用されている。

○友愛会の運動に関する多くの資料は、2012年8月1日、友愛会創立100周年記念に開設した、友愛労働歴史館に、①友愛会・総同盟から連合までの労働運動、②社会民衆党から民社党までの社会主義運動、③ユニテリアン教会・惟一館ゆかりの社会運動に関する資料等が収蔵・管理されている。

○同時に友愛労働歴史館は、関係する資料の収集・調査・研究とともに、一般展示など情報発信に取り組んでいる。その一例としては、常設展として、友愛会・総同盟（戦前）を中心とする日本労働運動の100年余と題し、①労働運動前史・福沢諭吉とユニテリアン、②戦前の労働運動・1897年～1940年、③戦後の労働運動・1946年～、④友愛会、鈴木文治・松岡駒吉のメッセージ に分類し、展示・情報発信を行っている。

3. その他参考文献

○著書：労働関係「はじめてものがたり」×50

出版元：全国労働基準関係団体連合会（2011年1月）

著者：労働評論家 久谷與四郎氏（労ペン元代表）

<著書本文一部抜粋>

◇労働運動発祥之地 運動の歴史を刻んで一世紀

・ビルに挟まれひっそりと

東京の都営地下鉄三田線の芝公園駅。田町方面の改札を抜けてから、右側の階段を上るとビル街に出る。そのまま真っすぐ100メートルも歩かないうちに、「日本労働運動発祥之地」と刻まれた高さ2.1メートルの黒御影石の碑が建っている。側面には次のような銘文を読む事ができる。（以下略）

・貴重な資料の宝庫「資料室」

友愛会はその後会員を増やし、大正8年、大日本労働総同盟友愛会に、さらに翌々10年には日本労働総同盟と改称。その後の分裂、産業報国運動の下での解散と、さまざまな苦難を乗り越えながらも、今日の「連合」に歴史が引き継がれてきた。日本の近代的労働運動にとって、ここは源流の地なのである。（以下略）

○著書：労働運動二十年

出版元：一元社（1931年5月）

著者：鈴木文治（1885年 - 1946年）

○季刊・現代の理論：コラム/温故知新

◇東京下町の労働運動と大正デモクラシー ～下町の労働運動史を探访する～

出版元：現代の理論・編集委員会 WEB版 季刊・現代の理論17号（2018年11月）

執筆者：現代の労働研究会代表 小畑精武氏（労ペン元幹事）

<記事中发现し一部抜粋>

～ 前 略 ～

- ・友愛会の結成・鈴木文治が会長に（記事本文は略）
- ・友愛会初の争議（記事本文は略）
- ・鈴木文治が山内みなに出会ったスト（記事本文は略）

～ 後 略 ～

○労働運動史関係：「労働組合の基礎」（2021年6月・日本評論社刊・UAゼンセン企画）の第1章

「労働運動の歴史」（仁田道夫・東京大学名誉教授執筆）より

- ・15人で発足した友愛会は急速に発展した。1922年には日本労働総同盟と改称し、戦前日本労働運動の主流組織として活動していくことになる（P10）

○連合前会長・古賀伸明氏（電機連合）友愛会100周年コメント（日本労働新聞／2012.8.20）

・1912年8月1日、人道主義者であり優れた指導者であった鈴木文治氏を中心とする15人によって友愛会が創立され、まさに、日本の労働組合運動史に偉大な1ページが刻まれた。友愛会創立当時、労働運動は政府による激しい弾圧の下で大いなる呻吟の時代にあったことが想起されるが、先達たちは想像を絶するような困難に立ち向かいながら、まさに心血を注ぎ、命を賭して、運動を前に進められた。

以上